**週刊やすいゆたか再刊10号16年１月29日
古代における三度の「日本国」建国譚**

**９、日本国と天皇号の成立**

石渡信一郎著『聖徳太子はいなかった』

寺崎：聖徳太子論争というのが古代日本史では大きなテーマになっています。二つのタ イプがあって、石渡信一郎さんたちの蘇我王朝論でいきますと、馬子・蝦夷・入鹿の時代は蘇我王朝だったので、その間の天皇は架空の人物だったというもので す。橘豊日大王(用明天皇)が架空なら、その息子厩戸皇子も架空である。それで聖徳太子という人格は、蘇我氏の専横的な面を取り除いた、仏国土を目指し、和の精神を強調した面を人格化したもので、それで聖徳太子は蘇我馬子であるとか入鹿であるとかいう人もいます。蘇我王朝論者は主に民間史家の間で流行っていますね。
　それからアカデミズムの聖徳太子非実在論の代表格は大山誠一さんです。彼は、厩戸皇 子は実在したけれど、聖徳太子と言われるような業績は何一つしておらず、後世の聖徳太子信仰に基づいて偽作されたものだという説です。まだ七世紀はじめでは文字も使い始めたばかりで、『憲法十七条』とか作れたり、難しい仏典の講義とかできるはずがないというわけです。

やすい：たしかに倭人は漢字使用を嫌ったようで、仏教公伝後やっと仏典を読むために 漢字の勉強を本格的にし始めたようです。歴史や神道儀礼なども語り部の口誦伝承しかなかったようですね。でも東アジアの中で、漢字文化の影響は受けていた ので、菩薩太子に仕立て上げるために、高僧を家庭教師に招いて英才教育をしたようですし、教養ある渡来人集団を組織して、急拵えに知識人を養成したと思われます。もちろん切実な動機がなければ、『憲法十七条』の制定や仏典講義は無理ですが、私は「日本」の第三建国期という特別な時期なので、成し遂げたので はないかと思っています。

寺崎：『憲法十七条』には「国司」などの当時には存在しないはずの用語があるので、偽作説が強いようですが。

やすい：もちろん『日本書紀』の作成時に奈良時代の人にも読みやすいようにしたり、 多少の誇張のための改作はあったと思いますが、仏教的な慈悲の心を持ち、和の精神で話し合って国を作っていこうということで、主神・皇祖神をどうするかと いうことなど、水掛け論で終わらないようにしているわけですね。これはそういう議論の中で話し合いのルールや心構えが必要だから造られたものだと思われま す。無理に決まっていると決めつけるのではなく、どうして出来たのか考えると納得いくはずです。

寺崎：しかし主神・皇祖神をどうするなど、議論してもまとまらないでしょう。反対論者は祟りが起こったら誰が責任をとるのだ。国が滅んでからでは後の祭りだぞと反発したでしょうし。

玉虫厨子「捨身飼虎図」

やすい：だから最終的には最高責任者として摂政である厩戸皇子が神罰を一身に引き受けると言ったのです。農業国家としてやっていくためにはやむを得ないことなので、差し替えられる神々には我慢してもらうしかない。民の暮らしの根本から考えてのことなので慈悲からくることで、仏が神を説得してくれるはずだし、祭祀も政治の一環だということでは儒教的にも許される。しかし神々に屈辱を与えて 誰も罰せられないわけにはいかないので、その神罰は最高責任者である厩戸皇子が一身に引き受けることで納得して欲しいと説得したわけです。そして皆の前で 神仏に誓ったのでしょう。

寺崎：それはまさしく捨身飼虎の精神ですね。そこまで言われたら反対できなくなったかもしれません。しかし、それはやすいさんの思いつきで、そう言ったという史料とかは皆無ですね。歴史物語と歴史学の混同の典型ですよ。

やすい：歴史物語でも現実的な根拠があれば、立派な歴史の解釈になり得るのです。何 故聖徳太子と呼ばれたのか、それは余程のことをしたからとも考えられます。聖徳太子のそれは太陽神の国「日本」を作ったことです。国号と正式に決めたとか ではなくて、天照大神が主神・皇祖神だということにした。しかも初めからそうだったことにしたわけです。時代を遡らせて、初めからそうだったことにしないと、元は違っていたのに人為的に身勝手に作り変えたことになってしまう。
　だから初めから天照大神が主神・皇祖神だったとされたことによって、過去に遡って主神・皇祖神であった栄光まで奪われたということになりますね。そんなひどいことをした以上、その罰を受けずに済むはずがないとすれば、その罰を背負う人が必要です。しかしその人はただの人では釣り合いません、相当の高貴で聖なる人物でなけれ ば吊り合わないのです。それでその人を聖化して聖徳太子としたと推察されます。

寺崎：実際にそれだけの凄い方だったから、罪を一身に背負って人々の大罪を贖ったのですか、それとも何もしていないけれど、罪を背負うので聖なる者とされたのですか？

やすい：罪を一身に背負うという決断をしたこと自体、極めて聖なる行為だと言えます から、たとえ他になにもしていなくても偉大なのですが、それだけ偉大な決断ができたのなら、器量もさぞかし大きい人物だったろうから、『憲法十七条』や仏典講義も出来ないことはなかったと言えるかもしれません。無碍に否定する必要はないのです。

寺崎：それでも主神から降ろされた、天之御中主神がその怒りのあまり、祟り神として祟ったら、天の中心がなくなって、天が崩れてしまうかもしれないと人々は怖れたでしょうね。

やすい：その心配に対して秦氏などのブレーンは世界には倭国のような国は何百とあり ますから、その一つが人民の産業の必要から、天之御中主神を主神から外したからといってお冠で、天の中心から離れたりはしませんと言っただろうと思いま す。でも我が身に置き換えて考えるのが、もののあはれを知るこころですから、大変罪深いと思ってなんとかしようと考えますね。それで考えだされたのが、大王の称号を天皇にするという案です。

法隆寺薬師如来像光背銘

寺崎：天皇号は、何天皇の時にはじめて使われたのかというのも、古代史論争の大きな テーマです。やすいさんの説だと推古天皇ということになりますね。しかし推古天皇の時代の遺物に天皇号の使用例がほとんでないのです、法隆寺薬師如来光背 銘なども偽物ではないかと疑われてしまいます。では天武天皇からだとすると、どうでしょう。唐の高宗が晩年、則天武后に天皇という称号にさせられたことの 猿真似ということになります。でも唐の真似としたら、唐が使用をやめたのになぜ日本はやめなかったのか不思議です。

やすい：法隆寺薬師如来光背銘が書風からいって七世紀末だと言われますが、それは何 らかの事情で光背が傷んでしまったので作りなおしたからではないでしょうか?その際に「大王天皇」という独特の表現、つまりわざわざ「大王である天皇」という言葉を使っているのは、天皇号が始まったばかりだという事情を反映しています。だから傷んで書き直す際に文面は変えずにそのまま書いたということでは ないでしょうか？
　もし天武天皇になってから天皇号がはじめて用いられたとしたら、七世紀はじめのもの だということにしている仏像の光背銘に「天皇」の文字を書き込むはずはないですね。だって、つい最近天皇号が使われ始めたことは誰でも知っていますから、「天皇」号が入っていると最近書いたとバレてしまいます。大山誠一さんらによると、法隆寺は天皇家と特別深い関係にあることを印象づけるために偽作したことになっていますから、偽作だとバレては困ります。だって国から援助をもらうために国家と天皇を欺いているわけで、バレたら重罪は免れません。偽作だと決めつけたら、文面も否定できると考えるのは詰めが甘いのです。
　それに唐の高宗の晩年の象徴的な地位に祀り上げられる時の称号をどうして真似たのか、真似たのなら唐ががやめたのをどうしてやめなかったのかの説明も弱いですね。高宗は白村江で倭軍を壊滅させた仇敵で、筑紫都督府を置いて侵攻を狙ったこともあるのですから、高宗に追随したというのは説得力がありません。

寺崎：対外的に皇帝だと唐に対して張り合っている感じなので、遠慮してでも王とか大王なら夷蛮の国と同等に見られるので、天皇というシンボリックな称号にしたという説明はどうですか？

やすい：それが対外的には天皇はあまり使ってなかったようです。**岩波書店『日本思想体系３　律令』**の**「令巻第七　儀制令　第十八」に「天子　祭祀に称するところ。天皇　詔書に称する所。皇帝　華夷に称する所。　陛下　上表に称する所。太上天皇　譲位の帝に称する所」**とありますから。東アジアの動向から考察すべきだと言われて、「天皇」称号を対外関係からばかり意義づけようとする研究が多かったようですが、こういう基本文献をしっかり踏まえて欲しいですね。

寺崎：やすいさんの場合は、天皇とは道教の最高神「天皇大帝」のことであり、その実 体は北極星である。北極星は日本では「天之御中主神」なので、「天皇」という称号は地上の天之御中主神つまり天之御中主神の現人神であるという意味であるとされているのですね。七世紀はじめに主神を天之御中主神から天照大神に差し替えたという仮説に立てば、天上では直ぐに隠れてしまったことになっているけれど、地上では地上の北極星として中心として統合していることになります。ですから主神差し替えの代償に大王の称号にし、大王を天之御中主神の現人神にしたということですね。

やすい：ええ、天照大神の支配する「日の本の国」に生まれ変わったけれど、天之御中 主神は天皇として現人神として天下を統合支配しているということです。丁度、七世紀はじめの神道改革の時期に「天皇」称号が使われ始めたとしたら、そのこととのつながりを考えるのが当然ではないでしょうか?

筑紫の山門(やまと)

寺崎：厩戸皇子が摂政の時期に神道改革があり、天照大神が主神・皇祖神になったのが 「日本国」の三度目の誕生という説ですね。これまでの「日本国」誕生というのは正式国名として「日本国」は何時から呼ばれるようになったのかということで、地名としては大八洲、国名としては豊葦原瑞穂の国というのが記紀には記されています。また中国からは扶桑国という言い方もあり、倭人の建てた国としては倭国と呼ばれていました。
　「やまと」は元々は地名で扇状地のような「山門」ということでしたが、「倭」で「やまと」と読むのは「倭人住むやまと」から由来しているのでしょう。それが勢力をまして畿内全体とかを支配圏に置くと国名になります。従って「倭」で「やまと」と読む場合は倭人の国を意味していまし た。『憲法十七条』で「倭」を同音の「和」に置き換えるようになり、「和」も「やまと」と読めるわけです。問題はその「やまと」が畿内にあったのか、筑紫にあったのか、あるいはその両方かということですね。

やすい：両方でしょうね。それで畿内の方は筑紫の「やまと」と区別するために尊号の 「大」をつけて「大倭」とか「大和」で「やまと」と読ませていたのです。西暦六〇七年の第二回遣隋使で「日出る処国」という言葉を使っていますから、「日の本の国」という意識はあったと思われます。大宝律令で「日本国」という規定があったらしいのですが、原本はないということです。それでも奈良時代には「日の本の国」と読んでいたらしいですよ。だから「日の本の国」を「日本国」のことと解釈する立場ですと、この天照大神の主神・皇祖神は日本国の三度目の建国と言えますね。

寺崎：しかしそうすると同じ王朝なのに国が変ったことなり、納得できないのじゃないですか？

やすい：王朝は同じでもその王朝のアイデンティティが大転換したのです。「夜の食国(をすくに)」から「日の食国」にね。そして同時に仏国土のイメージも慈悲の光で国の隅々まで照らす光の国のイメージですから、それとも重なります。

寺崎：すると磐余彦大王の建国精神が「八紘為宇」でそれに逆らうものは「撃ちてしやまむ」だったのに対して、「日の本の国」「日本国」の建国精神は「以和為貴」で「慈悲の心で話し合って決めていく」というところにあるということですか？

やすい：元々は自分たちの先祖が倒した国を再建して、自分たちの国にしたわけで、これこそ怨霊史観の図式にぴったりですね。そして自分たちを祟る神を主神にし、皇祖神にまでしたわけです。しかも主神から降ろした天之御中主神への信仰はその現人神としての天皇信仰として受け継いだということです。これも相手の身になって考える、「もののあはれをしるこころ」ですね。

寺崎：手放しで美化しすぎじゃないですか？日本国の歴史を見れば血を血で洗う権力闘争や戦争の繰り返しではないですか？

やすい：だからこそ、平和国家日本の伝統を掘り起こし、日本人の平和への熱い思いを隣国や世界の人々に分かってもらうことが大切なのです。それから梅原猛先生が太陽神の国日本を強調されるとき、自然エネルギー立国ということを訴えておられますね。原子力や化石燃料では未来がなくなったり、温暖化で住めなくなってしまう。太陽光や風水のエネルギーによって生きていくという国造りが大切で、その意味からも、現在こそ「日本国」の建国がグローバルにも必要ですね。

寺崎：そんなことを言うと、それこそ世界を日本化する新手の「八紘一宇」であり、超国家主義的ウルトラ右翼と誤解されませんか？　続く